

国際会議レポート：IECON2005 The 31st Annual Conference of the IEEE Industrial Electronics Society

IEEE/IECON に久しぶりに参加した。1974年に初めて参加して以来、30年以上の付き合いである。IE SocietyのPresident(1986-87)を勤めてからでも20年経つ。今回、併せて行われたIE Societyの理事会で、大西公平教授(慶応大学)が次期会長(President-Elect)に選ばれた。心よりお祝い申し上げる。日本人が、IE Societyの会長になるのは3人目、IEEE全体でも6人目である。

IE Societyは、会員4,000名程度のIEEEのなかでは、小さなSocietyであるが、会員の60%以上がアメリカ人以外で、IEEEのなかでも最も国際的な活動をしていることで知られている。論文誌(Transactions)を3種類発行し(1つは、共同発行)、一年間に4個の主要な国際会議を主催し、他のSocietyとの共同開催は十数個におよび、大部分は、米国外で開催される。3つのTransactionsのEditor-in-Chiefは、すべて非アメリカ人である。このようなグローバルな学会の活動に、皆様が積極的に参加されることを強くお勧めする。

電気学会の会員である皆様は、電気学会における活動とどのように住み分ければいいのか。電気学会は、その技術的レベルが非常に高いにもかかわらず、国際的な情報の発信力がなく、いわばローカルな同好会である。日本の電気学会で十分実力をつけたうえで、IEEEで活躍してほしい。これでは、日本のプロ野球とアメリカのMajor Leagueの関係ではないかと嘆く方もおられるだろうが、そのとおりであるから仕方がない。野茂、イチロー以来、日本のプロ野球も、かえって人気が出たではないか。電気学会の国際化は、至難の業である。おそらく韓国の電気関係学会のほうが、先を行くであろう。

IEEEの論文誌あるいは国際会議は、世界的に情報発信するには、すこぶる便利なメディアである。ただ、現存するIEEEの価値観にあわせて論文を書く必要がある。これも大変結構だが、IEEEの論文の価値観を形成する側で活躍されるのも意義あることである。すでにかんりの日本人がこの方面で活躍をはじめている。会員の皆様にがんばってほしい。電気電子の技術分野の、世界的に通用する価値観は、自分たちで作ってほしい。

原島 文雄(東京電機大学)

2005年11月6日から10日まで、アメリカNorth Carolina, RaleighのSheraton Capital Centerにおいて第31回IEEE Industrial Electronics Society Annual Conference, IECON2005が開催された。Raleighはいくつかの主要な大学(例えば、North Carolina State University, University of Carolina at Chapel Hill, Duke

Universityなど)を抱え、RTP(Research Triangle Park)と呼ばれる世界でもPh.Dの人口密度が高いことで有名な地域を有し、非常に学術的な色彩の強い開催地であった。

IECON2005では、6つのTechnical Tracksに加え、Poster sessionや、Education, Low-power, Integration, MEMS, Nanotechnology, Network-based, Renewable Energy, Electrical Machine(Future Electrical Vehicle), Embedded, Real-time, Wirelessといったキーワードに関連するSpecial Sessionsが設けられた。IE Societyの骨格をなす分野はもちろん、最近のTopicsに関する研究が精力的に報告され、非常に内容の濃い学会であった。

特に、Keynote-Speechとして、Human Adaptive Mechatronics, Towards Intelligent Distributed Systems, Electrotexiles: Challenge and opportunitiesなるタイトルで、Dr. Harashima, Dr. Schoop, Dr. Pourdeyhimiによる講演がなされた。これらの講演において「知性」と「相互作用」という共通したキーワードが垣間見られたことは、本分野における今後の動向と重要なポイントに関する示唆が含まれており、非常に興味深い講演内容であった。これに関連してIndustrial Electronicsの将来性・方向性については、Panel discussionが設けられ、技術の革新、現在の取り組みとチャレンジ、今後のニーズなどについて活発な議論が行われた。

IECON2005開催にあたり、全859件の論文が投稿され、厳格な査読の結果、464件の論文が採択された。この結果、採択率は54.0%となり、クオリティを高めることに繋がっていると思われる。これら論文の著者は52カ国で1378人にもものぼり、9つのPoster sessionsにおいて110件の論文が、76のOral sessionsにおいて357件の論文が発表された。本年のBest paper awardはR.Cardenasらが受賞し、Anthony J. Hornfeck Service AwardをO. Kaynak, Dr.-Ing. Eugene Mittelman Achievement AwardをM. P. Kazmierkowskiが受賞した。

また参加者同士の交流が促進されるようにCommitteeが多なる努力を払われたことは特筆すべきであると思われる。Welcome Reception, 趣向を凝らしたAwards BanquetだけでなくAuthors' Breakfastも円滑に運営されていた。Technical Toursでも、学術都市としてのRaleighを堪能する絶好の機会が得られた。

岩瀬 将美(東京電機大学)

(平成17年12月1日受付)